

<書評>

ラングマンのとなり

「ミニマル発生学」

岡 敦子●著

評者 市原 真(札幌厚生病院病理診断科主任部長)

医師 21 年目である私の手元には、発生学の本がぜんぜんなかった。唯一持っていたのは、学生時代に購入した『ラングマン人体発生学 第 7 版 日本語版』(医学書院 MYW, 1999 年 3 月発刊の第 5 刷)だけ。発生学の本なんてなくてもいいでしょ、現役医師なら一冊あれば十分でしょ、と、なぐさめてくださる方もいらっしゃるかもしれない。でも、少なくとも私は、臨床に暮らす日々でずっと不全感を抱いていた。

「近年のトピックスとして中腎様腺癌が挙げられ……」

「中腸由来の神経内分泌腫瘍は後腸由来のものとは異なり……」

「臍臓の divisum では腹側臍と背側臍の癒合が……」

「脊椎に発生した脊索腫が……」

「母斑細胞は由来が神経堤なので免疫組織化学で S-100 が陽性となり……」

成人の体の中に「ない」構造の名前が出てくると、途端に硬直してしまう。脊索って脊髄と違うんだっけ(※違います)。神経堤って神経管と違うんだっけ(※違います)。

発生学の試験前に詰めこんだ知識のほとんどはすっかり萎縮した。それは発生の過程の中で「役目を終えたから合目的に退縮した」のとはわけが違う。本当は今も使える知識なのに、長いこと用いずにいたから廃用性に萎縮したのだ。

無自覚だったわけではないし、危機感がなかったわけでもない。「どこかで一度、発生学をやり直さないといけない」という気持ちはずっとあった。たまには必要に駆られてググったりもした。でも、ふしぎなことに、発生学はググってもよくわからないのだ。基礎的な単語の意味やかんたんなシェーマ

などはすぐ見つかるのだけれど、それらを有機的に結んで「知恵」にする作用がオンラインではうまく働かない。

だから私は本書に飛び付いた。「ミニマル」すなわち必要最低限の知識だけ書いてあるということか。謙虚だなあ。でもちょうどいいや。読み始めてしばらくして気付く。あれ、発生学でこんなに分子生物学的な知識を使ったっけ? 分子発生生物学だった?

あたりまえのことだが発生学もまたこの 20 年で進歩していた。今の学生が聞いたら笑うだろうけれど、おじさんは Hedgehog ファミリーも Wnt ファミリーも発生学と組み合わせで学んだことはなかったのである。発生学の本で、腫瘍学で聞き慣れた遺伝子の話を踏まえて網羅できるというのはうれしい誤算だ。イラストは美しい。文面は「学生向け」と言いつつ決して簡単すぎないし媚びていない。ミニマル(最低限)というのはミニマム(最低の)という意味ではない。これくらいは最低限知っていないと、今の時代に医師をやっていけない、という意味。

買って長く手元に置いておきたい本と、借りて済ませてしまえる本というのがある。一度目を通せば後は売り払ってもいい本というのもなくさんある。でも、発生学は手元に長く置いておけば何度でも活用することができる類いの学問だ。24 年にわたってあちこちの本棚に連れ回した孤独なラングマンのとなりに、ついに新顔がやってきた。

●「ミニマル発生学」

B5・頁 168 2023 年 10 月

定価: 3,740 円(本体 3,400 円+税 10%)

[ISBN978-4-260-04938-2] 医学書院刊